



子どもの領分

「スプーン付けますか？」
パンや野菜の販売に混じって、夏を惜しむかのように、アイスクリームの移動販売車も出店し、子育てひろば「いずみ」は、いつも以上に賑やいでいた。

子どもを囲むこの場所で、世代や立場や所属をも越えて、地域みんなが緩やかにつながっていくきっかけにと、フェスタと銘打った小さなイベントを定期的に開催をしている。4月の「さくらフェスタ」に始まり、5、6、7月と回を重ね、この日は「さよならサマーフェスタ」。

その中で参加者たちから聞こえてきたのは、在園する子どもたちとの触れ合いを求める声だった。

これは、子どもたちにとっても、新しい体験のチャンスかも知れないと直感した副園長は、まずはお散歩ついでに立ち寄ってもらったり、てるてる坊主や笹飾りなど、フェスタ会場の飾りを作って届け



てもらったりと、この数ヶ月、子どもたちと「いずみ」とのつながりを、少しずつ育んでいたのがあった。

そしてついこの日、子どもたちが、アイスクリームの移動販売車を出店することになったという訳だ。

実はこの出店にも紆余曲折がある(4・5歳児の誌誌: 8月29日、9月1日、9日、20日、21日を参照)。

たまたま床に落ちていた画用紙と折り紙で、保育者が即興でアイスクリームを作ってみたことから、この夏、4・5歳児を中心に、このアイスクリームの造形活動が大流行り。

コーンの中のアイス、色とりどりの絵の具で着色するようになる頃には、本物にも負けない色鮮やかな出来栄に、すっかりこの遊びに魅了されていた子どもたち。「アイスクリーム屋さんよろうよ」と声が上がるのも時間の問題だった。

そうと決まると、得意の段ボールカッターを駆使し、商品棚などのお店作りが始まる。保育者が気に留めた新たな素

材を持ち込む度に、子どもたちの表現力やその緻密さが、どんどんと深まることを目の当たりにする保育者たち。

「売りたい気持ちがい僕できない!」
そんな声が上がりが始める頃には、お客さん役として当てにしていた3歳児の「うみぐみ」の子どもたちも、いつの間にか、アイスクリーム工場の一員になっていた。すると4・5歳児の間からは、「どうする、お客さん役いなくなっちゃったよ!」と困惑の声が。

そしてここから、別の運命の糸がつながっていく。その顛末を聞いた副園長から、フェスタへの出店のオフアが舞い込んできたのだ。

地域の人たちに販売するというこの新展開に、さてどうやって売るの? という話に。一人の子から「移動販売車というのを見た」と声が上がると、園の車を使えるのか、誰が運転するのか、遊歩道に車は入れるのかと、すぐに現実の壁に突き当たる子どもたち。そこへ、

「みんなのアイスクリーム屋



国内外を問わず、子どもたちが作ったものを、実際に地域社会へ販売するという保育実践や教育実践は実は度々耳にする。実社会の枠組みの中で思考させるという意味で、大人好みで

あったりもする。

一方で、自分たちの世界を、現実の世界へと近づけるのではなく、反対に周囲の人たちを、自分たちのごっこの世界に引き入れようという今回の子どもたちの決断は、実はとても思慮深い選択だったように私には思える。

友だちや家族と過ごす世界とは異なり、見知らぬ者たちが行き交う地域社会。今はまだ、手作りの紙幣で、自分たちの世界との間にしっかりと境界線を引き、一定の安心感を確保しながら、この地域デビューに挑んでいた子どもたちに、拍手を送りたい。

みんなができることを…それは、みんなのお店なのだから。それは、このみんなでしかできないことなのだから。

園長 折井誠司

●編集 幼保連携型認定こども園せいび
●発行 折井 誠司
●印刷 折井 誠司
●発行所 幼保連携型認定こども園せいび
社会福祉法人 誠美福祉会
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-12
電話 042-675-1551
ファックス 042-677-5643
E-mail seibi@kodomoakyo.jp
http://kodomoakyo.jp